

変わりゆく英米の英語発音を追って

—G4の発音表記の特色

南條健助



私が『ジーニアス英和辞典』の発音表記を担当させていただくのは、改訂版（1994）、大辞典（2001）、第3版（2001）に続いて、G4で4度目となります。今回は発音表記を全面的に見直し、大幅な加筆修正を行ったほか、使用されている発音記号に関しても初版（1988）以来最大の改訂を行いました。例えば、大辞典と同様に、短母音の/i, u/という記号を、より精密な/ɪ, ʊ/に変更したことも、その1つです。その他の改訂のポイントは次の通りです。

① lot や problem などに含まれる米音の/a/という記号を、father や palm の母音と同じ/a:という記号に変更しました。従来は、両者に長短の区別があるように言われていましたが、実際には前者も長めに発音され、標準的な米音では、両者は同一の母音であるというのが事実です。

② caught や law などに含まれる米音の/ɔ:/という母音に、逐一/a:を併記しました。今日、米国の多くの方言において、/ɔ:/の代わりに/a:/を用いる話者が増えているからです。ただし、米国方言の権威であるWilliam Labov教授（私信）によれば、現時点ではまだ米国人の過半数に達していないとのことで、（米+）として示しました。

③ arrow や carry などに含まれる米音の/æ/という連鎖を/er,（米+）æ/と表記しました。今日の米音では、/r/の前の/æ/は/e/で発音される方が一般的だからです。米国内ではもはや少数派ですが、/æ/と発音する方言もありますので、それも（米+）として併記しました（英音は/æ/です）。

④ what, where, white などにおけるwh-という綴り字の発音を/w-,（米+）hw-/と表記し、英米共に/w-/の方がより一般的な発音であることを示しました。従来は、/hw-/という表記が用いられ、英音で

は/h/を発音しないが、米音では発音すると言われていましたが、今日では米音でも/h/を発音しない話者の方が多数派になりました。

⑤ Tuesday, tune や due, reduce などに含まれる英音の/tj, dj/という連鎖に/tʃ, dʒ/を併記しました。例えばdurableには、/d(j)ʊərəbl/のほかに、（英+）として/dʒʊ:rəbl/という発音も載せました。これは最近、若い世代を中心に、英国で急速に広まりつつある新しい発音であり、音声学者のJohn C. Wells教授（私信）は、日本人学習者もこのように発音して差支えないと述べています。

これ以外に、英音では、「割り込みのr (intrusive r)」と呼ばれる綴り字にない/r/が入った発音を併記した語もあります。例えばdrawingには、（英+）として、/drɔ:riŋ/という発音もあることを示しました。このような発音を耳にした際、日本人学習者にはdrawlingとの聞き分けが難しくなります。また、「割り込みのr」が入ると、sawingとsoaringは、どちらも/sɔ:riŋ/と発音され、両者は同音になります。「割り込みのr」は、英音の聞き取りにおいて不可欠な知識ですので、適宜これを示しました。

このほか、今回の改訂でも、個人的に付き合いのある英米の著名な音声学・言語学者から、最新の英語発音辞典にもまだ載っていないような貴重な音声事実を提供してもらえたので、実際のくだけた発音なども含め、変わりゆく英米の英語発音を、正確かつ豊富に表記することができました。目下、英米で増えつつあるstrongの/ʃtrɔ:(ː)ŋ/という発音なども、その一例です。今回の改訂によって、G4は、まさに「発音のジーニアス」と呼ばれるにふさわしいものになったと自負しています。

（なんじょう けんすけ・桃山学院大学文学部助教授）